

地球史に名

チバニアン

77万~12万6000年前 「千葉時代」決定へ



県市原市の地層=2016年3月

四十六億年におよぶ地球の歴史を表す目盛りの役割を果たすのが地質年代と呼ばれる時代区分で、その年代が具体的に何年前なのかを示す基準となるのが国際標準模式地だ。これまで約十七万~約十二万六千年前の時代区分の名前がなかった。そこに千葉にちなみ名がつく見込みとなつた。

時代を区分する目印として、生物の大絶滅による化石の変化や、氷河期

初の日本名 空白埋める

など気候変動の痕跡などのほか、地球磁場の逆転の跡も使われる。地球は大きな磁石の性質を持っているが、N極とS極が反転して入れ替わる現象が過去に何度も起こっている。こうした地磁気の逆転は地質をつくる岩石に痕跡を残すからだ。

市原市の地層には、最も新しく起こった七十七万年前の磁場逆転の跡がつきり残る。国内の多くの研究者が協力し、微生物の化石や火山灰を調べることで地磁気が逆転した年代や環境を精密に割り出した。世界的標準にふさわしいことを示す綿密なデータをそろえてライバルを突き放した。(永井理)

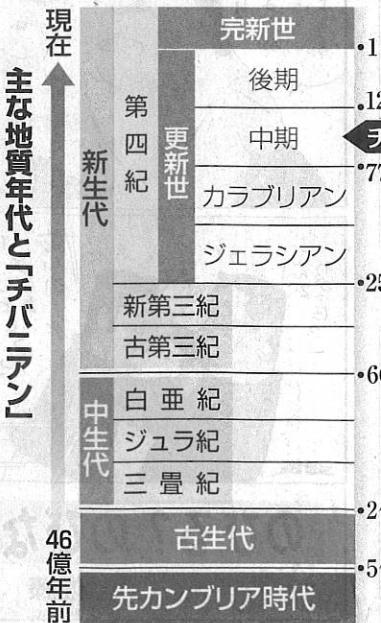
市原の地層 磁気逆転跡

国立極地研究所は13日、地球の歴史のうち77万~12万6000年前を「チバニアン(千葉時代)」と名付けるための申請が、国際学会の1次審査を通過したと発表した。審査は続くが、結論が覆った前例はほとんどなく、来年中に正式に決まるところとみられる。地質年代に日本にちなんだ名称が付くのは初めて。

=「地域の起爆剤に」②面

千葉県市原市で見つかった十七万年前の地層をもとにしたチバニアンが六割以上の支持で選ばれた。四十六億年に及ぶ地球の歴史は、地層中の化石などをかり決める地質年代で分け、恐竜が繁栄した「ジュラ紀」や「白亜紀」などがあり、さらに細かな年代に分かれている。茨城大や極地

地層には、七十七万年前に地球の磁気のN極とS極の向きが逆転した跡が、鉱物などに良好な状態で残っている。岡田誠茨城大教授(古地磁気学)は「地学に関する心をもつてもらえる良い材料になる」と喜びを語った。この地層はかつて海底にあったころに積もり、その



研のチームは六月、市原市地層には、年代の境界を示す代表的な地層の「国際標準模式地」にふさわしいと申請し審査を受けていた。地層には、七十七万年前に地球の磁気のN極とS極の向きが逆転した跡が、鉱物などに良好な状態で残っている。岡田誠茨城大教授(古地磁気学)は「地学に関する心をもつてもらえる良い材料になる」と喜びを語った。この地層はかつて海底にあったころに積もり、その

会の一次審査。票が僅差な結果が実施する三回の審査を経て正式に認定される。あつたが、一回で決着した。今後、国際地質科学連合が実施する三回の審査を経て正式に認定される。沿いの崖に現れている。市原市を流れる養老川は、繁栄した生物や環境の変化に基づく「地質年代」で区分する。国際地質科学連合は、年代の境界を観察しやすい代表的な地層を「国際標準模式地」として世界に1カ所ずつ認定。世界で65カ所以上あるが、大半が欧州で日本はない。



国際標準模式地